

なぜ今、HPV スクリーニング検査が必要なのか

—— 若年世代を守り、ワクチン接種につなげる新しい予防医学 ——

HPV（ヒトパピローマウイルス）は、子宮頸がんのほぼすべての原因であることが知られており、さらに近年では口腔がんや咽頭がんなど、一部のがんとの関連も明らかになっています。HPV 感染は主として若年期に起こりますが、多くの場合、自覚症状がほとんどなく、日常生活に支障をきたすこともありません。そのため、若い世代ほど「自分には関係のない問題」と受け止められやすい感染症でもあります。しかし、疫学調査からは、18 歳から 24 歳の若年世代においても、すでに一定割合が HPV に感染していることが示されています。つまり、HPV は将来の話ではなく、すでに現在進行形の問題です。

日本では、HPV ワクチンの積極的勧奨が一時中断された影響により、現在の 18～24 歳世代が、定期接種から外れ、十分な情報提供や接種機会を得られなかった「予防の空白世代」となっています。この世代では、「ワクチンは知っているが接種の機会がなかった」「今さら接種して意味があるのか分からない」「自分が感染しているかどうか分からない」といった理由から、予防行動が止まってしまっている状況が見られます。

HPV 感染は痛みや症状がないため、検診に行く動機が生まれにくく、ワクチン接種も後回しにされがちです。ここで重要な役割を果たすのが、スクリーニング検査です。本プロジェクトで実施する HPV スクリーニング検査は、病気を診断することを目的としたものではありません。自分自身にも感染の可能性があることを「知る」きっかけをつくり、予防について考える第一歩を提供することを目的としています。

HPV ワクチンは、すでに感染していない型に対しては、年齢に関わらず予防効果が期待できることが分かっています。スクリーニング検査で陰性であった場合には、「今なら守れる」という明確な理由をもってワクチン接種に進むことができます。一方、陽性であった場合でも、「他の型の感染を防ぐ必要がある」という理解につながり、同様にワクチン接種が勧奨されます。つまり、検査結果がどちらであっても、その先にある行動は予防であり、ワクチン接種へとつながります。

本プロジェクトの特徴は、羞恥心の少ない自己採取方式を採用している点にあります。女性は月経血、男性は唾液を用いることで、痛みや身体的負担を伴わず、検査を受けることができます。検査は簡便で短時間に実施でき、教育と一体化した形で提供されます。これは医療行為を拡大するものではなく、若年世代の健康リテラシーを高め、主体的な予防行動を促すための新しい予防医学の取り組みです。

HPV 関連がんは、正しい知識と適切な予防行動があれば、防ぐことができるがんです。今、若年世代に対して、正確な情報を届け、自分の身体について考える機会を提供し、ワクチン接種という具体的な行動につなげることは、将来の医療費や社会的負担を軽減するだけでなく、多くの命を守ることにともなわれます。

スクリーニング検査はゴールではありません。

それは、未来を守るためのスタートです。